

月刊

2017

2
月号

みんぱく

特集

災害を 越えて

東日本大震災の経験に学ぶ 竹沢尚一郎

被災地のまちづくりの主役は誰か? 白澤良一

三陸は芸能の宝庫 日高真吾

鬼神殿にみる震災復興のかたち 藤本延啓

歴史資料ネットワーク 奥村弘

ユネスコ無形遺産 曳山伝統と女人禁制

二〇二六年十二月、ユネスコの無形文化遺産に日本全国三三の祭り「山・鉦・屋台行事」の登録が決まった。それぞれの屋台行事には、歴史的な謂れや地域の人たちの熱い思いが込められており、祭りの維持などに悩む地元にとっては大きな力になるにちがいない。私自身、昭和五〇年代の研究者時代から水環境調査を中心に町づくりにかかわってきた長浜の曳山が登録されたことは大変感慨深い。

長浜の曳山は特に「芸山」と言われ、豪華絢爛な山は、長浜町衆の先取性とそれを支える経済性の賜物ともいわれている。舞台では男子による子ども歌舞伎が演じられ、八幡神社への奉納がなされる。今も「女人禁制」で曳山運行への女性参加は禁じられている。

毎年一ヶ月以上かけて芸を仕込み子ども役者に育てあげていくのは若い衆の責任だ。若い衆の多くは子ども役者だった。曳山祭に不可欠な三役（振付・太夫・三味線）とシャギリも地元で担い手が養成されている。こうして世代をつなぐ祭りを支えたコミュニティが、町づくりの拠点の黒壁再生などを果たした社会関係資本ではないかと私は思っている。

長浜曳山について語るとどうしても思いおこす人がいる。市内中心部を流れる米川支流の浄化活動に最晩年の命を注いだ片野喜代土さんだ。片野さんは南片町といういわゆる遊郭街で大正三年に生ま

嘉田 由紀子

プロフィール
1950年埼玉生まれ。京都大学探検部時代のアフリカ調査から水と環境の大切さを痛感。ウイスコンシン大学大学院、京都大学大学院修了。農学博士。1980年代より水と人の関係性研究を琵琶湖、アフリカなどで進める。琵琶湖博物館総括学芸員、京都精華大学教授を経て2006年から2014年まで滋賀県知事。2014年からびわこ成蹊スポーツ大学学長

れずつとそこので育った。家の中には米川支流が流れ、夏のホタルやゴリ、秋のビワマスなど、まさに四季の自然が豊かな遊郭街だった。子ども時代から曳山に登りたかったが、「女の町のもんは乗せられない」と拒否され、さびしい思いもしてきたという。数年間片野さんとお付き合いをさせていただき、なぜあれほどまでに米川の清浄さを取り戻す運動に命を注いだのか、ある時ふっと理解した。「そうだ、米川は片野さんにとっての曳山だったのではないか！」と。平成二年六月、ホタルが蘇った米川ぞいの自宅で七六歳の人生を閉じた。

それから十八年後の平成二〇年四月、滋賀県知事となった私に、長浜市長とともに曳山祭りの役者行列の先頭を歩く役を下さった。氏子組の間で一年以上議論をして、歴史始まって以来の女性参加となつたようだ。ただ、実はこの渡り行列にはひと工夫凝らされていた。氏子総代が先頭のそれまでの行列の配置を変えて、総代を最後尾にもつていき、いわば先頭部分は神とかかわらない分離空間に仕上げたのだ。見事な差配である。伝統を維持しながら、前例のない女性知事の受入空間を生み出し、氏子集団の中での合意形成を図ってきたのだ。

夕渡りの晩、私は米川の横を歩きながら、「片野さん、長浜の町では、片野さんが理想とする徹底合意の町づくりがすすんでいますよ！」と心の中で報告した。

月刊 みんなぱく

2月号目次

- | | |
|--|--|
| <p>1 エッセイ 千字文
ユネスコ無形遺産 曳山伝統と女人禁制
嘉田 由紀子</p> <p>特集 災害を越えて</p> <p>2 東日本大震災の経験に学ぶ
竹沢 尚一郎</p> <p>4 被災地のまちづくりの主役は誰か？
白澤 良一</p> <p>5 三陸は芸能の宝庫
日高 真吾</p> <p>7 鬼神殿にみる震災復興のかたち
—熊本県西原村から
藤本 延啓</p> <p>8 歴史資料ネットワーク
—阪神・淡路大震災以来の歴史資料保全の歩み
奥村 弘</p> <p>10 ○〇してみました世界のフィールド
エジプトの空手稽古
相島 葉月</p> | <p>12 みんなぱく Information</p> <p>14 味の根っこ
オタマジャクシのナムブリック
飯田 淳子</p> <p>16 文化遺産おもてうら
エルサルバドルの芸術と大聖堂
—何に価値をおくのか？
村野 正景</p> <p>18 手芸考
「おのくん」とバンセ・ソバージュ
杉本 星子</p> <p>20 ながなんちゃ
子どもの名前どうする？
蔡 照鏡</p> <p>21 次号予告・編集後記</p> |
|--|--|

災害を越えて

甚大な被害と大きな爪痕を残す地震や水害。この国に暮らす以上、どこでも誰にでも起こりうることもなかもれない。企画展「津波を越えて生きる——大槌町の奮闘の記録」の開催に関連して、東日本大震災における被害と、それを乗り越えていこうと奮闘する人びとの姿に加え、阪神・淡路大震災と熊本地震という、過去そして現在の災害とそこから始まった活動をとりあげ、これから起こりうる災害と対峙するであろう「われわれ」の可能性として考える。

企画展 津波を越えて生きる——大槌町の奮闘の記録
会期 二〇一七年一月一九日(木)ー四月二一日(火)
場所 国立民族学博物館 本館企画展示場

去過程で見つかる書類やアルバムの整理と清掃が仕事である。書類のなかには通帳や権利書さえあったので、普通ならば役場職員の仕事である。しかし、津波によって役場が破壊され、三分の一の職員が命を奪われた大槌町役場にその力はなかったのだ。
一カ月後、わたしたちは地元有志がはじめた復興まちづくりの手伝いをするようになる。それと並行して、災害を記憶するための博物館等



東日本大震災の翌年のホタテ収穫



んだら、みんなで道路つけつかあつてことになって。ヘリポートがあるわけだべ、農村広場にさ。
で、ヘリで物資を持ってきてても駄目だつて。最初ははあ、小学校からヘリポートの農村広場まで

芳賀藤一

吉里吉里はやったんです。消防分団の消防車も、重機、石油燃料も。一切外部との連絡がとれないんでね。災害対策本部を立ち上げる、地域の人たちで。最初来たマスコミの人たちがね、町の運営所だと思っていたんですよ、災害対策本部だから。しかし実態は吉里吉里地区避難所運営所みたいな感じで。そこで道路確保とか、ヘリポート確保とか、そういうことをやった

芳賀正彦

震災の翌日、燃え続ける大槌町中心部(撮影・小川芳春)

の施設が建設されるだろうと考えて、資料を集めはじめた。津波の痕跡の写真を撮り、人と会って話を聞き、許可を得てビデオに収録した。インタビューした方は二五〇人にのぼり、ビデオ撮影も五〇人を超えている。

展示は何を目指すのか

今回、みんばくで実施する「津波を越えて生きる——大槌町の奮闘の記録」は、東日本大震災から五年半を経てようやく実現した企画展である。展示はこの地震にかかわるものだが、それを広く伝えるというより、わたしが通っている大槌町に焦点を当てている。地元の人びとが撮ったビデオや写真、語り、証言を中心に、わたし自身がつくった模型や、被災前の町の姿を再現した模型や、彼らの生活と文化をあらわす民俗資料を加えて構成されている。

展示のねらいは、震災で大きな被害を出した大槌町の人びとが、地震と津波をどのように経験したかを再現することにある。彼らがどのように津波を逃れたか、あるいは逃れなかったのか。数日にわたり外部から遮断された彼らがか、どのように助け合いながら生き延びたのか。いくつかの避難所では被災者自身の手で五カ月にわたって炊き出しをおこない、がれきを撤去して道路を開削したが、そうしたことがなぜ可能であったのか。ビデオの画面から発せられ、壁面のパネルから浮き上がってくる彼ら自身のことばこそが、展示の核心である。

東日本大震災の経験に学ぶ

竹沢尚一郎 民博 民族文化研究室

大槌町との出会い

二〇一一年三月二日、京都に住むわたしの家でもゆるやかな揺れが生じた。揺れの長さも規模の大きさを懸念させたが、テレビをつけても報道はない。報道ヘリコプターが被災地の状況を伝えはじめたのはようやく一時間後だった。壊滅的な被害を受けた三陸沿岸の市街地や集落の光景は、今も目の前に浮かんでくる。その光景にショックを受けたわたしと妻は何をするにも熱が入らなくなった。話し合っ、支援に行くことを決めたのが数日後。とはいっても、被災地ではガソリンが入手できないという。ガソリンの流通が再開したとの報道があった四月初旬、車に TENT や寝袋、二週間分の食料を積み込んで、わたしと妻と娘は三人で岩手県に向けて出発した。被災地との長いつきあいはじまりだった。

建物が流されたのでテントにもうけられた大槌町のボランティアセンターに行くと、書類の整理を依頼された。自衛隊員によるがれきの撤



上：住民の吉里吉里地区対策本部会議(提供・芳賀潤)
下：震災後に設立された協同組合と真ん中おおつち(提供・と真ん中おおつち)

展示のなかには、沖から押し寄せ、町を破壊していく津波の威力を示すビデオがあり、町が完全に廃墟と化した被災翌日の写真がある。これらは被災者自身が撮ったものだが、見方によってはむごい印象を与えるだろう。しかしそれでも、彼らが経験した津波の恐ろしさの十分の一しか伝えていないかもしれない。

展示を通じて訴えたいのは、地震の威力を我が身に引きつけて受け止めることである。南海沖や東海沖などの大地震が生じることが予測されている今日、東日本大震災を生き抜いた人びとの経験に耳を傾けることはわたしたちにとって貴重な経験になるはずだ。将来生じるであろう地震に対して、わたしたちはどれだけの備えをおこなっているのか。地震に対して備えるために、わたしたちはなにをすべきなのか。来館者がこれらの問いを自分のこととして問うことを、わたしは願っている。

被災地のまちづくりの主役は誰か？

白澤良一 特定非営利活動法人
遠野まごころネット理事長

大槌湾の先祖帰り

東日本大震災でわたしが住む大槌町の市街地の約九六パーセントが壊滅した。築一五年のわたしの家や収集資料もすべて失い、残ったのは神仏に生かされた命だけである。



震災後に蘇った砂浜

震災数日後、大槌湾の被災状況を見に行った。目に映ったのは無惨に破壊された家屋、なぎ倒された家の屋根に船先を乗せている光景が辺り一面を覆っていた。改めて自然災害の想像を絶する恐ろしさを思い知られた。崩壊した岸壁のコンクリートに上がって海を眺めたら、何故か不思議な光景が脳裏に浮かんだ。

「湾内を覆い尽くしている倒壊家屋、車両や横転している漁船など無数の災害物を除去したら……」と考えた瞬間、なんとわたしが子どもどき遊んだ砂浜や干潟、防潮林があった当時の景色が目の前に広がっているような錯覚に陥った。まさに「先祖帰り」の様相である。人工建造物を自然の力で元の形に戻したのである。

あのときの砂浜は、わたしたちの格好の遊び場であった。春は潮干狩り、夏は海水浴場となり、近隣市町村から大勢押し寄せ大変な賑わいであったことを今でも鮮明に記憶している。レクリエーションの場だけでなく、海苔やワカメの



上：コミュニティづくりを支えてくれた仲間たち。
右から2人目が筆者（提供：遠野まごころネット）
下：まちづくり説明会

まちづくりに反映されない地域の声

「二一世紀は環境の世紀」といわれている。大槌町都市計画マスタープラン（平成二六年八月）も、「豊かな自然環境の景観形成に配慮した美しいまち」を明文化している。岩手県環境基本計画でも砂浜や干潟を増やそうとしている。今を逃したなら、チャンスはないと思っている。

国や専門家も「二一世紀のまちづくりは地域が主役」と唱えている。大槌町のまちづくりフォーラムでも、「住民の意見を尊重してまちづくりをおこなう」という役場職員の答弁を幾度となく聞くが、未だにその形が見えてこない。

大槌町の戦略復興会議では、人口増の特効薬は「企業誘致」と唱えているが、それよりも「福祉と環境」を中心とした計画の推進を考えるべきである。まちづくり説明会で手をあげても、膨大なバックデータをもちながら理論武装する当局の姿勢に忸怩たる思いがある。町を俯瞰的にどのようにとらえているのか説明を求めても答えてくれない。

単に昔に戻せといっているのではない。環境の変化に応じて自然の力で回復させるべきである。何故なら豊かな生活文化は、生き物の空間、所謂、生態系があって成し遂げられると信じているからである。町民の財産である公共空間が心地よさを失っては、無機質なものになってしまう。今後の行く末が不安であり、注視していかなければならない。

三陸は芸能の宝庫

日高真吾 民博文化資源研究センター

復興に果たす芸能の役割

「三陸は芸能の宝庫」。わたしは、民俗文化財の保存活動をおこなうなかで、このことをよく耳にしてきた。

東日本大震災でおこなわれた文化財レスキューで、わたしはおもに民俗資料を担当していた。文化財レスキューは、有形の文化財を対象とするため、無形の文化財となる芸能とは直接関係がないようにみえるが、じつのところ、人びとの生活から生みだされた民俗文化財の保全を考えるためには、有形・無形の両方をみていく必要がある。二〇一一年当時、次々に再開されていく三陸の芸能の数の多さ、多様さ、何よりも地域との密接な関係については、ただただ目をみはるばかりであった。文化財レスキューをおこないながら、わたしは、東日本大震災関連のニュースでもさまざまな形でとりあげられていた「芸能の活動が三陸の復興の原動力となる」ということについて、身をもって体験していたのである。

このときに出会った郷土芸能の関係者の一人が、笹山政幸さんである。釜石市在住の笹

山さんは、ご自身も被災しながら、地域の復興活動に尽力され、また、周辺地域の郷土芸能の支援も精力的におこなわれている。わたしは、笹山さんが救出した石造の獅子頭の修復の相談を受けたことがご縁で、今日までお付き合いが続く。今回の企画展「津波を越えて生きる——大槌町の奮闘の記録」では、臼澤鹿子踊り、城山虎舞、吉里吉里大神楽の三団体を紹介いただいた。いずれの団体も、企画展のプロジェクトリーダーである竹沢尚一郎教授が、大槌町の活動拠点としていた地区の郷土芸能の団体である。

地元で活力を与える郷土芸能

臼澤鹿子踊りは、天明年間（一七八一〜一七八九年）に茨城の鹿島神社を訪れた町民が「扇州踊り」に出会い、その技術を取得して故郷に伝えたことにより完成したといわれているが、その起源は諸説あるようである。東日本大震災のときには、活動の拠点である伝承館を開放し、避難所として支援をおこなった団体である。

城山虎舞は、一九九六年、町内の若者により組織された。釜石市尾崎町虎舞の岩間久一氏の指導を受けたのが契機となった団体である。二〇〇二年より町内の栄町、須賀町地域を活動拠点として現在に至っている。東日本大震災では、活動基盤の会館、山車、虎頭、太鼓、衣装、小道具などを流失したものの、見事に復活し、教育機関等とも連携して児童生徒の参加を促進させるなど、精力的な活動を展開している。

吉里吉里大神楽は、屋号「鍛冶屋」に伝わる話では、嘉永三（一八五〇）年生まれの三浦駒吉が保存していた獅子頭を地元へ寄贈して普及につとめたことが始まりといわれている。城山虎舞同様、東日本大震災で大きな被害を受けたが、自ら稽古場を復活させた。また、津波で流失しなかった獅子頭を手本に、会員自らが獅子頭を彫るなど、力強い、再生を果たした団体である。

いずれの団体も震災前から地域に根ざし、震災後は地域復興の原動力となる活力を地元にも与えている。今回の企画展では、特別に、この三団体より頭や衣装をお借りし、展示する。また、三月十九日は、みんぱく研究公演「城山虎舞 in みんぱく」を開催予定である。「三陸は芸能の宝庫」。その素晴らしさも今回の企画展で感じていただければ幸いである。



上：城山虎舞（提供・城山虎舞）
右下：白澤鹿子踊り（提供・白澤鹿子踊り）
左下：吉里吉里大神楽（提供・吉里吉里大神楽）

鬼神殿にみる震災復興のかたち ——熊本県西原村から

西原村での被災

二〇一六年四月の熊本地震、わたしが住む西原村も震度七を記録する猛烈な揺れに襲われた。四月十七日のいわゆる「本震」時、わたしは自宅で家族と就寝中だった。停電で街灯も消えた真つ暗闇のなか、妻と一緒に三月月の乳呑み児と三歳の幼児をかかえて近隣の小学



筆者の自宅近くの道路。激しい揺れで地盤が引き裂かれ、通行は不可能だった

校へ逃げ、ご近所と安否を確認し合った。夜が明けて、見慣れた風景が変わり果てていることを知った。つぶれて屋根だけになったような家々、真つ二つに割けた道路を目の当たりにして、これからこの村はどうなっていくのだろうか、強烈な不安感に襲われた。先の見えない様相に、本震の翌日、家族を妻の実家の徳島県へ避難させた。それから三カ月半のあいだ、わたしは西原村災害ボランティアセンターの統括として、被災地で生活しながら支援活動の差配に日々を送ることとなり、現在も支援へのかかわりを続けている。

被災の個別性と「復興」

被災地で暮らし、支援に携わるなかで、被災に強い「個別性」が存在することを感じている。それは、物理的な家屋被害の大小のみならず、世帯の経済状態や職業、家族の事情といった個々の生活の背景に基づくものであり、復旧・復興への歩みの相違として顕在化する。そして時間が経てば経つほど拡大する。例えば、集落に視点を置いてその「個別性」

ふじもとのぶひろ
藤本 延啓

熊本学園大学講師



宮山神社での「鬼神殿」。人びとは舞台上に腰掛けながら神楽を楽しんでいた

をとらえるならば、その場で自宅再建を目指す者と、別の土地での生活を選ばざるを得ない者の相違、結果として集落がバラバラになっていくことが見えてくる。社会基盤が「復旧」しても、人びとの暮らしは元には戻らない。



神楽の舞台は地震で崩れた拝殿跡に設置されたもの。ボランティアによって作業が進められた

震災は終わらないのだ。「復興、復興」とことばではやたら聞くが、いったい「復興」とは何なのだろう。

鬼神殿のあらたな姿

そんななか、村内の宮山神社で例大祭があった。毎年一月三日に開催されるこの祭りは、神楽の演目名から「鬼神殿」とよぶこともあるようだが、六年前からは神事のみでなく、地元有志による手づくりの屋台が出るようになり、多くの来訪者で賑わうようになった。

宮山神社は、今回の地震で拝殿が完全に倒壊し、本殿も傾いた。しかし、それでも「祭りはやるよ」となった。拝殿の跡に台を組み、露天の拝殿・舞台とした。舞台の周りを囲むように屋台を並べた。露天の舞台で繰り広げられる神楽、そのまわりで歓声を上げる人びと。物理的なモノが崩れてしまっても、人びとのな

かにある気持ちと伝えてきた暮らしは崩れていない。そればかりか、屋台と混じり合った露天の舞台で鬼神殿を催すというあらたな姿を生み出した。

地域でつくりあげる「復興」

じつは、この宮山神社は、享保二〇（一七三五）年に村内の別の集落である布田の山中から現在の場所に移されている。その理由は、豪雨による地滑りで崩落する可能性があったためだと伝承されている。つまり、この神社そのものが、すでに西原村が経験していた「復興」の姿でもあったのだ。

「もとに戻す」ことにこだわりすぎるのではなく、「変化をうけとめて、つくりあげていく」ということ。被災地で悩む日々のなかで、地域の暮らしに根ざした「復興」の、ひとつのかたちを見た思いである。

歴史資料ネットワーク

阪神・淡路大震災以来の歴史資料保全の歩み

おくむら ひろし
奥村 弘

神戸大学大学院教授
歴史資料ネットワーク代表委員

多発する災害と史料ネットワークの広がり

一九四八年の福井地震から、一九九五年の阪神・淡路大震災まで四七年間、日本の都市部では震度六弱以上の大規模地震は起こらなかった。阪神・淡路大震災が、ボランティア元年とよばれたことに象徴されるように、市民に基礎を置いた大規模自然災害対応は、この震災をとおして社会的に通念化し、歴史文化の領域でもはじめて組織的な対応がおこなわれた。関西の歴史学会を中心に歴史資料ネットワーク（略称史料ネット）が組織された。史料ネットは倒壊家屋から一五〇〇箱におよぶ歴史資料を保全するとともに、阪神・淡路大震災資料の保存にも携わった。現在、史料ネットは学会会員と歴史文化に関心をもつ多様な市民も含めた個人会員により活動を続けている（史料ネットの詳細はHP <http://sinyo-net.jp/>）

参照）

阪神・淡路大震災以降、次々と直下型地震が起こり、二〇二二年の東日本大震災後も、淡路島（二〇二二）、長野県北部（二〇二四）、昨年の熊本、鳥取中部と地震が続き、大規模水害も恒常化している。史料ネットは阪神の経験を災害の現場に伝え、活動を支援してきた。現在、二〇を超えるほぼ府県を単位とした歴史資料保全組織が立ち上がっている。史料ネットはこれらを緩やかに繋いでおり、各地の状況共有と相互支援を強めるため、二〇一五年に神戸で第一回全国史料ネット研究交流集会を開催、「神戸宣言」を採択し、二〇一六年に第二回（福島県）、第三回（愛媛県）と継続されている。

市民の手で地域の歴史遺産を守る

史料ネットは、被災地域の歴史資料である（被災歴史資料）と、大災害そのものを伝える（災害資料）の二種類の歴史資料保存を進めてきた。文化庁が指定文化財を中心とするのに対して、この多くは住民の身近にある未指定の多様な歴史資料であり、史料ネットはこれを地域の歴史遺産と位置づけ、保全を進めている。



上：2009年、兵庫県佐用町水害で保全された近代史料
下：津波被災史料のクリーニング



阪神・淡路大震災時の伊丹での巡回調査

また身近な史料だけに、水損や破損については所有者レベルでの迅速な対応が重要であり、市民レベルの緊急対応策について、文化財保存研究者や修復家ともに実践的な研究と試行を進めてきた。現在、東日本大震災津波地域の被災歴史資料のクリーニング活動を市民ボランティアの方々と進めるとともに、市民が水損史料に応急できるよう、日常品を使った水損史料保全ワークショップ等をおこない、歴史資料の減災に向けた活動を進めている。

歴史資料という古文書や著名な人物の文書が想起されることが多く、阪神・淡路大震災では、史料ネットのメンバーが被災地域を巡回し、ビラやチラシなど住民一人一人の記憶にかかわる身近な史料も地域の記憶を次世代に繋いでいくうえで重要であることを住民に説明して理解を得ることが重要であった。東日本大震災では、写真や位牌等、個人や地域の史料が、消防等により瓦礫のなかから見つけられ保存された。被災者に返還され、史料ネットが支援している宮城ネットに史料保全をお願いが市民から次々と寄せられた。市民レベルで記憶を次世代に引き継ぐことへの関心は大きな広がりをもち始めている。各地のネットワークは、これを基礎に、市民と歴史文化関係者が協力し、災害の多発する日本列島において地域の歴史遺産を守る活動を強めている。さまざまな形でこの活動への参加をお願する次第である。

エジプトの空手稽古

あいしま はつき
相島 葉月
民博 先端人類科学研究部



空手の先生をしてみました

黄帯の贈呈式にて

エジプトで空手家コミュニティの調査中に空手教室のアシスタントの依頼が舞い込んだ。指導者として振る舞うことで思いがけない発見に出会った。

「仕事場」の外へ

エジプトの知識人についての博士論文を書いていたころの「仕事場」は喫茶店だった。インフォーマントと待ち合わせをして、お茶を飲んだり、水たばこを吸ったりしながらいろいろな話を話した。エジプト滞在が二年過ぎたころから座ってばかりの調査に嫌気がさし、少しは身体を動かすことのできるテーマはないものかと考えた結果、空手家コミュニティについて研究することを思いついた。エジプトは中東・アフリカ地域を代表する空手大国で、カラテは子どもの習い事として人気を博している。

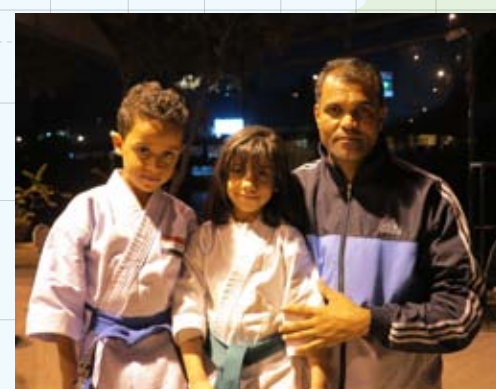
スポーツや芸術に関する調査をおこなう者は経験者が多い。日本の高校のバスケットボール部について研究していたアメリカ人の友人は、大学までバスケットボールをしていた。ヨーロッパで活躍する日本人音楽家について論文を書いた友人は、素晴らしいヴァイオリンの腕前をもつ。一方、わたしは空手に関する研究課題の構想を練り始めたものの、武道経験がまったくなく、帯の締め方すら知らなかった。少しは空手について知らないこと調査に支障が出ると思いき教室に通い始めたが、昇級試験を受ける機会がないまま五年ほど経った。エジプトでは二年間で茶帯を取る子どもがいることに鑑みると、信じ難い遅さである。

武道初心者が「キャプテン」に

二〇一五年秋、カイロでの調査中によりやく白帯から黄帯に昇級したころ、子ども向けの空手教室を運営する方からアシスタントの仕事依頼された。先生は早朝から私立校の体育教師を務めた後、昼食をとり三時ころに帰宅し、夕方からは空手を教えに出かける。週末も道場をほしする先生の教室に出稽古に訪れた際に「君の技は初級者とは思えないほど力強い。わたしの補助教員をしてみないか？ 五〇〇ポンドの月給でどう？」とスカウトされた。これは日本円で三四〇〇円程度だが、大卒の初任給と同等の額である。エジプトでお金を支払うことはあっても、もらうことはないので仰天した。

指導者ゆえの孤独を知る

わたしはマンチエスター大学の教員であったことから、日常的に大学で講義をおこなっていたとはいえ、幼稚園児や小学生に接する機会は皆無であった。しかもアラビア語で何かを教えるのは初めてであった。自分が稽古を受けているときには「キャプテン」についていけばいいのだが、稽古をおこなう立場となるとまったく違った世界が見えてきた。ことばで説明するよりも手本を見せる必要があるため、普段よりも上達している気がした。また、幼児はとにかくわたしの関心を引きたがるのに驚いた。六〇人もいると指示を理解するスピードもレベルもまちまちだが、一人の生徒の技を直したら、他の子も「キャプテン、わたしも！」という視線を送ってくる。



エジプト伝統空手道協会主催の全国大会小学生の部で優勝した二人と先生

初稽古の当日、道場に到着すると、真っ白い道着に身を包んだ生徒が六〇人ほど待っていた。大多数は小学生以下の初級者だが、茶帯の中高生も数人いた。稽古を始めるあいさつをした後に、「本日、準備体操を担当するキャプテン・ハツキです。キャプテンの指示をよく聞くように」と言い、先生は道場の端で事務作業を始めた。エジプト人は敬称を好み、スポーツ選手や指導者は「キャプテン」、実績のある空手の先生は「センセイ」と呼ばれる。子どもたちはわたしが黄帯であるにもかかわらず「キャプテン」として認識し、掛け声にしたがって体操を始めた。



上：わたしが生徒として通っていた教室でおこなわれた昇級試験の祝賀会のケーキ
下：昇級試験の祝賀会で空手道の演舞をする子どもたち



★
エジプト、カイロ

稽古後にケンタッキーのチキンフィレサンドを食べながら、「君の声は通りが良い。とても堂々としていて、なかなか良い稽古だった」と言われた。エジプトでは褒めて伸ばすことを重視している先生が多い。空手の上達の前に、稽古に通うことが好きになる必要があると考える。それから数週間、わたしは先生の助手となり、生徒のことを話し合いながら過ごした。一人で大勢の子どもを指導する空手教室の先生は、意外と孤独な業務であることを知った。ラマダーン中も稽古を休めず、日没とともに一人でケンタッキーに行き、断食明けの食事をとるといふ。初任給をもらう前に調査が終わり、わたしはエジプトを去った。ケンタッキーを見かける度に、先生を思い出す。今日は家族と食事をしていればいいのだが。

開館40周年記念特別展
「ビーズ——つなぐ・かざる・みせる」
飾り玉、数珠玉、トンボ玉などを総称するビーズ。本展示では、私たち人類が作り出した最高の傑作の一つとしてビーズをとらえて、つくる楽しみ、飾る楽しみをおして日本や世界の人びとにとつてのビーズの魅力を紹介いたします。

会期 3月9日(木)～6月6日(火)
会場 特別展示館



企画展
「津波を越えて生きる」
大槌町の奮闘の記録」
岩手県大槌町の被災前の文化を紹介すると同時に、被災直後の人びとの行動や復旧の試みを展示の形でたどりま。将来起こりうる大規模災害に対する備えの必要性を示し、災害を乗り越えて過去から未来へと文化や伝統をつなぐことの意義を考えます。

会期 4月11日(火)まで
会場 本館企画展示場



大槌まつりの手踊り隊

■関連イベント
「フレズレットを作ろう」
植物ビーズの魅力」
自然素材のビーズのお話のあと、実際にフレズレットを作ります。

日時 3月11日(土)
13時15分～15時(13時受付)
会場 万博記念公園 自然観察学習館
講師 池谷和信(本館教授)
申込期間 2月9日(木)～2月23日(木)
※要事前申込、要参加費(材料費・保険代として300円)、定員40組、小学生以下要保護者同伴、雨天決行
お申込み・お問い合わせ先
自然観察学習館(開館10時～16時水曜休館)
06・6877・6923

■関連イベント
「研究公演「城山虎舞 in みんなく」」
日時 3月19日(日)
14時～16時10分(13時20分開場)
会場 本館講堂(定員450名)
※要事前申込、参加無料(要展示観覧券) 申込締切3月1日(水)必着

みんなく映画会
第36回ワールドシネマ
「幸せのありか」
ポーランドが民主主義へと移行していく1980年代、知的障害があるが感受性の豊かな少年マテウシュが、自分の感情を家族に自由に伝えられないまま、さまざまな経験を通して成長していく様子をえがきます。

日時 2月11日(土・祝)
13時30分～16時30分(13時開場)
会場 本館講堂(定員450名)
※申込不要、参加無料(要展示観覧券)
※入場整理券を当日11時から本館2階観覧券売場にて配布

連続講座
「みんなく×ナレッジキャピタル」展示キュレーションの誘惑——新しいみんなくの展示ができるまで」
本館の研究者が、展示という作業の醍醐味と魅力についてお話しし、展示キュレーションの世界へ誘います。第7回は、みんなく展示場で展示ツアーをおこないます。

日時 2月4日(土)13時30分～15時
会場 本館展示場
主催 国立民族学博物館
一般社団法人ナレッジキャピタル
展示キュレーションの誘惑
——みんなく展示ツアー
講師 吉田憲司(本館教授)
※要事前申込(定員30名、参加無料お問い合わせ先
企画課 博物館事業係
06・6878・8210

公開講演会
「恵みの水、災いの水——川、湖、海——」
津波、水害、干ばつなどの水にかかわる災害への人の対応について研究や政策実践を行ってきた講演者が、恵(めぐ)みの水災(わざわい)の水という視点から、人と水との多様なかわりかたとこれからの課題を論じます。

日時 3月21日(火)
18時30分～20時45分(17時30分開場)
会場 オーバルホール
(大阪市北区梅田、定員480名)
講師 竹沢尚一郎(本館教授)
嘉田由紀子
(びわこ成蹊スポーツ大学学長)
主催 国立民族学博物館、毎日新聞社
※要事前申込、参加無料、手話通訳あり
お問い合わせ先
研究協力課 研究協力係
06・6878・8209

みんなくミュージアムパートナーズ
「点字体験ワークショップ」
目で読む文字から手で読む文字へ、点字で異文化コミュニケーション・点字体験ワークショップを開催します。

日時 2月11日(土・祝)12時～15時30分
会場 本館エントランスホール
※申込不要、参加無料

●本館展示場の一部閉鎖について
本館展示場の一部改修のため、朝鮮半島の文化、中国地域の文化、中央・北アジア、アイヌの文化及び日本の文化の各展示場を、2月22日(水)から3月22日(水)まで閉鎖いたします。

※各イベントについてくわしくはみんなくホームページをご覧ください。
※電話でのお問い合わせの受付時間は、9時～17時(土日祝を除く)です。

みんなくセミナー

時間 13時30分～15時(13時開場)
会場 本館講堂
定員 450名(当日先着順)
参加費 無料(展示をご覧になる方は展示観覧券が必要です)
第465回 2月18日(土)
津波を越えて生きる——大槌町の奮闘の記録
講師 竹沢尚一郎(本館教授)



祭りの熱気は昔も今も変わらない

企画展「津波を越えて生きる——大槌町の奮闘の記録」に関連し、被災地のひとつである岩手県大槌町に焦点を当てて、被災前のまちな姿と、被災直後のまちな風景、そして被災直後から半年間、まちの各地で実現された人びとの助け合いの様子を紹介いたします。

みんなくウィークエンド・サロン
研究者と話そう

※申込不要、参加無料(要展示観覧券)
本館の研究者が「現在取り組んでいる研究」調査している地域(国)の最新情報「みんなく」の展示資料について分かりやすくお話しします。

2月5日(日)14時30分～15時30分
本館ナビひろば→アイヌの文化展示場
アイヌの衣文化
話者 齋藤玲子(本館准教授)

2月12日(日)14時30分～15時
本館ナビひろば
博物館資料をソース「ミニミニ」に再会させる
話者 伊藤敦規(本館准教授)

2月19日(日)14時30分～15時30分
本館ナビひろば→アイヌの文化展示場
アイヌの信仰・儀礼
話者 北原次郎太
(本館特別客員教員/北海道大学 准教授)

2月26日(日)14時30分～15時
本館ナビひろば→展示場
展示場のなかの資料を「まもる」
話者 園田直子(本館教授)

カレッジシアター

「地球探究紀行」
みんなく教員が執筆した臨川書店発行「フィールドワーク選書」を中心にお話しします。

時間 13時～14時30分
会場 あへのハルカス近鉄本店「スペース9」
※要事前申込(参加状況により当日受付あり)、参加費各回1000円
共催 産経新聞社、近鉄文化サロン、スペース9
特別協力 国立民族学博物館、千里文化財団
2月8日(水)
スリランカで運命論者になる
——仏教とカーストが生きたる島
講師 杉本良男(本館名誉教授)

2月22日(水)
ブタを連れて海を渡った人たち
——ミクロネシアの発掘調査から
講師 印東道子(本館教授)
お申し込み・問い合わせ先
ウエーブ産経カレッジシアター係
06・6633・9087

友の会

友の会講演会(大阪)

会場 本館第5セミナー室(定員96名)
※当日先着順、会員無料(会員証提示)、一般5000円
第464回 3月4日(土)13時30分～14時40分
バキスタン北西部の異教徒、カラシヤ人
講師 吉岡乾(本館助教)
バキスタンの北西部、ヒンドークシ山脈の谷にひっそりと暮らしているカラシヤ人。かつて「黒い異教徒」とよばれていた彼らは、イスラーム教国のバキスタンにありながら、独自の多神教を信仰している人びとです。本講演会では、彼らのその宗教や、それに基づく生活のあり方、さらにその言語について、周辺民族との関わりや歴史的な背景などもふまえて、写真・映像を織り交ぜつつ紹介いたします。

※講演会終了後、講師を囲んで懇談会をおこないます(40分)。
第465回 4月1日(土)13時30分～14時40分
「特別展「ビーズ——つなぐ・かざる・みせる」関連」
つなぐ・かざる・みせる
——ビーズにさぐる人類の多様な営み
講師 池谷和信(本館教授)

※講演会終了後に講師の案内のもと、展示見学会をおこないます(40分)。

東京講演会

第117回 2月25日(土)13時30分～14時40分
異文化が交差する物語
——アラビアンナイトからのぞく中東世界
講師 西尾哲夫(本館教授)
会場 モンベル御徒町店4Fサロン
9世紀に原型ができたといわれる、中東の文学アラビアンナイト。じつはこの物語、18世紀にヨーロッパ人に見出されるまで、中東ではさほど親しまれる存在ではありませんでした。ヨーロッパ人に「発見された」この物語からは、中東に向けられたまなざし、そこに暮らす人びとの文化や信仰心、世界観を感じ取ることが出来ます。千一夜という大長編に至った経緯とともに、物語をとおして中東の人びとが育んできた価値観をさぐります。

※講演会終了後、講師を囲んで懇談会をおこないます(40分)。
※要事前申込(定員60名)、会員無料、一般5000円

刊行物紹介

■大丸弘、高橋晴子 編
『日本人のすがたと暮らし——明治・大正・昭和前期の「身装」』
三元社 8,000円(税別)
日本人は舶来の品々・文化をどのように批判し、そして受け入れていったのか。新聞・雑誌記事、広告など、膨大な同時代資料によって、明治から敗戦までの日本人の日常を再現する。本館名誉教授の大丸弘と本館外来研究員である高橋晴子のみんなくにおける研究成果であり、本館ウェブサイトで公開中の身装画像データベース(近代日本の身装文化)に含まれる「参考ノート」をもとに刊行した。

国立民族学博物館友の会 電話 06-6877-8893 (9時～17時、土日祝を除く) FAX 06-6878-3716
http://www.senri-f.or.jp/ E-mail minpakutomo@senri-f.or.jp

味の根っこ

タイ、コンムアンの雨季のおかず オタマジャクシのナムプリック

飯田 淳子

川崎医療福祉大学教授



オタマジャクシのナムプリック (手前左と右奥)

百万の水田

わたしはタイ北部の「コンムアン」あるいは「ユアン」とよばれる民族の村でフィールドワークをおこなっている。周辺の山地民とは違い、コンムアンは平地（盆地）に住むタイ系民族であり、一三世紀から一九世紀末にかけてチェンマイを中心に栄えたラーンナー・タイ王国を形成したことで知られる。「百万の水田」を意味する「ラーンナー」の名が示すとおり、水田稲作を営んできた。

コンムアンの主食はもち米である。村では一日三食おこわを食べる。一緒に食べるおかずは野菜や魚、そしてそれほど頻繁ではないが鶏肉や豚肉、卵などである。また、日本の納豆とみその中間のような「トゥアナオ（腐った豆）」という大豆発酵食品を、スープに溶いたり和え物に混ぜたりといった形でよく用いる。おこわを手で一口大に丸め、おかずと一緒に口に運んで食べるのがコンムアンの作法である。

家庭の味ナムプリック

バラエティに富むコンムアンのおかずのなかで典型的なもののひとつに、ナムプリックがある。ナムプリックとは、トウガラシ（プリック）をはじめさまざまな食材を日本のすり鉢サイズの臼でつき混ぜて作るペーストであり、そのままご飯や野菜につけて食べたり、スープや煮込み料理に溶いたりして用いる。ナムプリックはタイの他の地域でも広く見られるが、地方や家庭によって無数のバリエーションがある。北部ではプリック・ヌム（辛みの少ない長い青トウガラシ）・玉ねぎ・にんにくをあぶったものを用いたナムプリック・ヌム、ひき肉やトマトを入れミートソースにも似たナムプリック・オーンなどがよく知られている。

わたしの調査村で日常的によく食べられるのは、トゥアナオを用いたナムプリック・トゥアナオや、沢蟹さわがにのペースト（ナムプー）を用いるナムプリック・ナムプーなどである。同じ種類



トゥアナオ (手前) とナムプー (右奥) のナムプリック

のナムプリックでも家庭によって入れるスパイスの種類や分量などが微妙に異なり、味もさまざまである。主婦たちはよく近所の人とナムプリックを交換し、「○○さんのところははちよつと辛いね」などと言って批評し合っている。

田起こしの季節に

七月から八月ごろには、オタマジャクシのナムプリックがよく食べられる。雨季が始まってしばらくしたころにあたるこの時期に、村人たちは田植えをおこなう。田んぼでの農作業の後、オタマジャクシをとって帰ってきておかずにするのである。もちろんカエルもおかずになるが、この時期はオタマジャクシが旬の食材となる。



おしゃべりしながら泥抜き

近年、都会で就労する若者が増え、村で農業を継ぐ人は減る傾向にある。そ



換金作物の畑の下に広がる水田

最初にオタマジャクシ料理と遭遇したときには、食べるのにさすがに躊躇ちゆうちゆうした。しかしフィールドワーカーとしては、村人から出されたものを食べないわけにはいかない。小魚と似たようなものだと思うことにして思い切って食べてみると、ドジョウに似た食感だが、スパイスで泥臭さは消されている。そのうちに躊躇なく食べられるようになった。

れに伴い、所有している水田の耕作を家族以外の村人や村外の人に任せる老夫婦が増加している。また、畑で栽培される作物も変化し、最近では飼料用トウモロコシをはじめとする換金作物の栽培が盛んになっている。その影響で農業や化学肥料が多く散布され、沢蟹はとれなくなり、他地域から購入されるようになった。村人たちがオタマジャクシをかうようになる日が来るのだろうか。

オタマジャクシのナムプリック (4~6人分)

オタマジャクシ	適量 (ポウル1杯)
ウコン (ターメリックの粉末)	適量
プリック・ヌム (シトウで代用可)	適量 (10個程度)
にんにく	1かけ
青ネギ	少々
塩	少々
ナムプラー	少々

- ① オタマジャクシの泥を抜く。
- ② 鍋に湯を沸かし、ウコンとオタマジャクシを入れて煮る。
- ③ プリック・ヌムをあぶる。
- ④ あぶったプリック・ヌムとにんにくを臼（すり鉢で代用可）でつぶす。
- ⑤ ④に塩とオタマジャクシの煮汁を少々入れてさらにつぶす。
- ⑥ ⑤に煮たオタマジャクシを入れて少しつぶす。
- ⑦ 小口切りにした青ネギをかけて全体を混ぜる。
- ⑧ 容器に移し、味を見て辛すぎたらナムプラーをかける。

エルサルバドルの 芸術と大聖堂

—— 何に価値をおくのか？ ——

村野 正景 ましかげ
京都文化博物館学芸員

宗教、政治、そしてアート。それぞれの価値観が錯綜する模様を、エルサルバドルの国民の精神的よりどころであるメトロポリタン大聖堂の変遷からみていく。



アートと社会開発を 結びつけた芸術家

エルサルバドルの観光地や空港でよく見かけるユニークなアートがある。国民的芸術家



ジョルトが工房を開いた芸術の町 ラ・バルマ
壁も柱もジョルト風 (2007年)

フェルナンド・ジョルトの作品だ。さながら葛飾北斎の浮世絵が日本のイメージとして各所で利用されるように、この国の姿を表現した彼の（または彼に影響を受けた）意匠は至るところでお目にかかる。二〇一三年に国民文化賞を受賞したとき、作品が高く評価されることも、「地図にあらたな点を書き加えた」と長年の功績を讃えられた。彼の芸術は、何もなかったところに工芸品産業を創出し、アートの町を生み出したのだ。

大聖堂に現代アートを導入
こうした高い評価は、宗教界にも届く。同国のカトリック教会の中心たるメトロポリタン大聖堂のファサード制作に彼が登用されたのだ。首都サンサルバドルの歴史ある建造物を、現代アートが飾ることになったのである。

この国は、他の中米諸国と同様、一六世紀にスペインの植民地となる。そして一九世紀の独立を契機に大聖堂は建造された。しかし地震による倒壊や焼失等の被害に遭い、一九五〇年代には貧困層支援に資金を回したこともあって再建は遅れた。このときの大司教はオスカル・ロメロ。黒人解放運動で著名なキング牧師らと並び、英国のウエストミンスター寺院に掲げられる「二〇世紀の一人の殉教者」の一人である。後に地下礼拝堂に「聖」ロメロの遺体が埋葬され大聖堂のシンボルとなる。この由緒ある大聖堂のファサード制作にあたり、ジョルトは西洋的キリスト教的意匠だけ

ではなく、先住民の文化的意匠を取り入れ、ロメロが護ろうとした普通の人のびとを描き、約三〇〇枚の陶板にこの国の姿を表現しようとした。また教会は、資金不足を補うため基金を

作り、広く信者等に陶板一枚一枚の所有者になるよう寄付を呼びかけた。こうして一九九九年、大聖堂は落成し、ジョルト生涯の大作は完成した。その後文化庁は、大聖堂を含むエリアを二〇〇八年に歴史保護地区に指定し、さらに大聖堂の歴史性や芸術性を評価し、単独で有形文化財として登録しようとした。



英国の聖ジョージ大聖堂の
ロメロ・クロス (2016年)

宗教の混合した行為が見られるなどの特徴をもつ。その意味で、白のデザインは原理主義的ですが、ジョルトのデザインこそエルサルバドル的だった。今、白の大聖堂は、芸術家や彼を支持する多くの人のびとの、そんな眼差しを受けている。言い換えれば、一見、没個性となった大聖堂は複雑な価値意識を喚起させる文化遺産となったのだ。

右：大聖堂のファサード（部分）。民家や人びとが描かれる（撮影・白井卓、2007年）
左：すべてが白になった大聖堂（撮影・Henry Sermeño、2016年）



錯綜する価値観

しかし事件は起きた。二〇〇九年から大司教の座に就いたエスコバル・アラスの命により、二〇一一年末、ファサードの陶板が剥がされ、全面が白く塗り直された。教会は当初、陶板の劣化の問題を挙げ、また文化遺産保護の指定範囲に陶板が含まれると知らなかったと述べた。しかし後に、文化庁の指定を押し付けと感じており「教会（聖）と政府（俗）は別」であること、そしてなんとデザインが世俗的で大聖堂にふさわしく

ないと主張するに至った。元文化庁長官は「すべてのアートは聖俗かかわりなく文化遺産で保護対象だ」と反論したが、この事件は「法治国家として本心に機能する保護の仕組みは何か？」「この国における宗教芸術のあり方とは？」といった議論の発端となった。

じつは興味深いことに、事件と同じころ、ジョルトはますます評価を受け、彼デザインの十字架が同国の他の教会や英国の聖ジョージ大聖堂へ「ロメロ・クロス」として受け入れられていった。理由は十字架にふさわしいデザインだからだった。当地のキリスト教は、例えば聖週間の儀式にキリスト教と在地

二〇一六年八月、「文化法（Ley de Cultura）」が議員の満場一致で可決された。高等芸術養成所の設立、文化芸術活動支援の資金確保、先住民文化の保護など、あらゆる文化芸術が保護・振興されるべきと明記された。宗教と政治、宗教とアートの関係において錯綜した価値観をもつこの国で、今後この法がどんな力をもつのだろうか。白くなった大聖堂は再び変わるのか。ロメロ・クロスはさらに普及するのか。今後この国が何に価値をおくのか目が離せない。

「おのくん」とパンセ・ソバージュ

杉本 星子 京都文教大学教授



「おのくん」とパンセ・ソバージュ（三色すみれ）

東日本大震災から約一年、仮設住宅のお母さんたちの手により「おのくん」が作られた。被災地の子どもへのプレゼントから生まれた手づくり人形がなぐもものとは。そして、そこに息づく「思考」とは。

に対して、手芸は「芸」である。芸といっても、職人芸でもまして工芸でもない。アートの世界で「手芸っぽいね」という評価は、アートとはいえないというダメ出しらしい。手芸を語ろうとすると、たくさん否定形がでてくる。とはいえず手芸の力はあなどれない。はからずもそれを再認識させたのが、二〇一一年三月一日に起きた東日本大震災だった。震災後、仮設住宅に身を寄せた女性たちを支援しようと、全国からミシンや端切れ、古着の布などが寄せられた。そんな仮設住宅のひとつから、「おのくん」が生まれた。

「おのくん」の誕生

二〇一二年二月、東松島市小野駅前応急仮設住宅がつくられた。集まった約八〇世帯の多くは旧野蒜地区の住民だったとい

え、さまざまな集落から来ており、互いにほとんど知らない同士での再出発だった。女性たちは、以前なら魚加工の仕事をしたり、畑仕事をしていたが、津波で職場も畑も失ってすることがなくなり、集会所に集まってお茶のみをして過ごしていた。「ともかく、ヒマだった」ので、「何かを作ろうよ」と、支援でいただいたミシンと布を使って巾着袋や服、コースター、お手玉に目をつけた蛙などを作り始めた。できたのは「しょーもない」ものだったが、それでもおしゃべりをしながら手を動かしていた。

年が明け、震災から一年ほどたったころ、あるボランティアさんが仮設住宅の子どもに、靴下で作った猿のぬいぐるみ「ソックモンキー」をプレゼントした。そのころ、復興支援の企画のなかで、それぞれの仮設住宅がモノをだして売ることになっていた

が、この仮設だけ何を作って売るか決まっていなかった。そこで、みんなでソックモンキーの作り方を習った。こうして、二〇一二年四月二〇日、記念すべき「おのくん」第一号が誕生した。

「おのくん」の里親になること

最初は誰も売れると思っていなかった。ひとつ千円、資金は〇円。在庫は三〇個まで。それ以上になったら働かないで「お茶飲み」をする。赤字にならない範囲で作ると決めた。初めは、ボランティアさんが買ったり、知り合いに売ってくれたりした。作りはじめて三カ月が過ぎたころから、人を介して「人形がほしい」という声が届けられるようになった。それまで、「めんどくしえ、めんどくしえ」と言いながら縫っていたので「めんどくしえ」人形といていたが、ちゃんとした名前をつけようということになり、「小野駅前で作っているから『おのくん』でいいんでねえ」ということで、「おのくん」になった。ただし姓は今も「めんどくしえ」である。

あるとき、東京で復興支援の催しがあり、東松島の物産を販売することになった。ボランティアさんが「おのくん」も持って行ったが、「欲しかったら東松島に来てくれ」といって見せびらかすだけで売らずに帰って

きた。少しでも多くの人に東松島に来てもらい、自分の眼で被災地を見てほしいと思っただからだという。こうして、「おのくん」が欲しい人は東松島に「おのくん」をもらいに行つて「里親」になる、というお約束ができた。里親さんたちは、フェイスブックの里親コミュニティ『目指せ！おのくんと七〇億人のタツバナス』や『おのくん親ばかサロン』に、「おのくん」との日々を写真でアップし、ときどき東松島に里帰りしてお母さんやほかの里親さんたちと交流したり、復興支援活動「おのかつ」をする。やがて「おのくん」の話は、クチコミやSNSで国内だけでなく海外にまで広がり、入手するには半年待ちといわれるほどの人気者になった。

「おのくん」に息づく「野生の思考」

ぬいぐるみの原型は呪物としての人形だという。「おのくん」が、東日本大震災という巨大な自然の力に対峙した人びとが心や生活を立てなおすなかで生まれたのは、偶然ではないだろう。「おのくん」の材料は里親さんから送られてくる。ハイソックスや五本指靴下、モコモコ素材の靴下など、いろいろな人が選んださまざまな靴下が世界中から集まり、お母さんたちの手しごとによって「おのくん」が生まれる。ひとつひとつの「おのくん」は、人びとの協働で創造される唯一無二のプリコラーージュ（器用仕事）作品である。「おのくん」を介してお母さんたち同士、お母さんと里親さん、里親仲間が隠喩の親族関係で結ばれ、東松島の被災者の思いと震災の記憶を共有するコミュニティが作りだされる。レヴィイストロースは、贈与の霊が動き出すとき、ヒトとヒト、ヒトと神が互酬的な関係でつながる世界が創りだされるとして、ヒトの文化の根底にある「パンセ・ソバージュ」すなわち「野生の思考」を論じた。「おのくん」には、近代の「栽培された思考」によって確立した裁縫、アート、工芸という分野が、「女子どもの手さすび」としての手芸に押し込め放逐してしまつた「野生の思考」の根源的な力が、生き生きと息づいているよつである。



おのくんのお母さん武田文子さんと新作絵本（おのくん公式HPより）

子どもの名前どうする？



What's in a name?

チニヒョウ
蔡熙鏡

東京外国語大学
アジア・アフリカ言語文化研究所共同研究員

わたしがまだ学部生だったとき、とある講義で先生が「靴紐くつじゆの先つちよの固い部分の名前ってなんだろう」とおっしゃったことがある。そんなものに、そもそも名前があることすら、知らなかった。あとになって調べてみたところ、ちゃんと名前があった。あの「靴紐の固い部分」の名前はアグレットというらしい。人は名付けたがり屋であり、ありとあらゆるものに名前がついている。今になって考えてみると、当時は何とも思わなかったあのエピソードが、そのことに気づくきっかけとなっていたのかも知れない。

我々は、きっかけは何であれ、一生に一回ぐらいいは名付けという行為をおこなう。名前をつける際には、名付けられるものの性質や外見などの特徴を取り入れたり、願望などを込めたりして名付けることが多いようだ。一方で、名付け行為には、命名者のセンスや性格が反映される側面もある。例えば、犬に「トド」という名前をつけたら、面白い(または変わった)人だなあと思われるかもしれない。もしも「iPS細胞」という名前ではなく、「山中幹細胞」という名前だったとしたら、命名者の秘めた遊び心を我々が垣間かま見ることではできなかったであろう。

ところで、この名付けというのが思わぬ議論を引き起こすこともある。隣の国である韓国で

は、九〇年代後半から「四文字の名前」をもつ人があらわれ始めており、今ではメディアでも見かけることがある。韓国は一般的に、姓一字と名前二文字の計三文字からなる人の数が圧倒的に多い。また、夫婦間は別姓を使っており、子どもは父親の姓を受け継ぐのが普通である。それに対し、「四文字の名前」をもつ人というのは、父親の姓と母親の姓の両方を一緒に使っている人のことであり、例えば「李」姓の父親と「朴」姓の母親の子どもなら、「李朴〇〇」と名乗っているのである。

このような動きは、家父長的な韓国の社会制度に対する不満や、男女平等という考え方がその動機になっているといわれている。今の韓国の法律では、婚姻届を出す際に、申請さえすれば、子どもに母親の姓を継承させることもできるように一応はなっている。そうはいつても、実際には父親の姓を引き継がせているのがほとんどであり、父母の両姓を一緒に名乗る「四文字の名前」に対しても、「反対意見の方がまだ多い」。

近い将来、結婚前に「子どもの名前どうする？」と韓国人カップルが相談し合う時代が来るかもしれない。もし、そのような時代が来たとして、この名付け問題がこじれて別れたりするカップルがあらわれないことを願いたい。



編集後記

2011年3月11日午後2時46分ごろ、三陸沖を震源とする大規模地震が発生した。本号の特集は、この東日本大震災とよばれる災害の直後から現地に入り込み、調査を続けてきた竹沢尚一郎教授が実行委員長となった企画展「津波を越えて生きる——大槌町の奮闘の記録」と連動している。

同日同刻、小生は、婚姻届の保証人欄の印鑑を東京の町田市で頂き、京王線で帰宅する途上であった。地震を感知し電車は急停車し、それ以外の交通機関も麻痺した。結局親に自家用車でひどい渋滞のなか迎えに来てもらった。自宅に着き、ほっと一息ついたのは、深夜12時過ぎ。それから自宅のテレビで甚大な被害状況を知った。

こうしたたわいのないものからことばにできないような深い悲しみまで、災害という出来事の喚起する記憶は、さまざまであろう。被災者の声や復興に向けた動きが展示されている企画展と本特集を通じて6年を経た現在の時点から東日本大震災を見返すことで、なにがしか考える材料が提供できればと思う。特集では併せてそれ以外の災害のその後の動きにも若干触れている。なお最後となるが、竹沢教授は、この3月に定年退職される。この展示は本館での最後の仕事のひとつとなる。今後の精力的な研究活動も楽しみにしたい。
 (丹羽典生)

●表紙：東日本大震災被災前の岩手県大槌町吉里吉里の模型。
 企画展「津波を越えて生きる」にて展示。制作・竹沢尚一郎

次号の予告

特集

ビーズ——つなぐ・かざる・みせる

月刊みんなぱく 2017年2月号

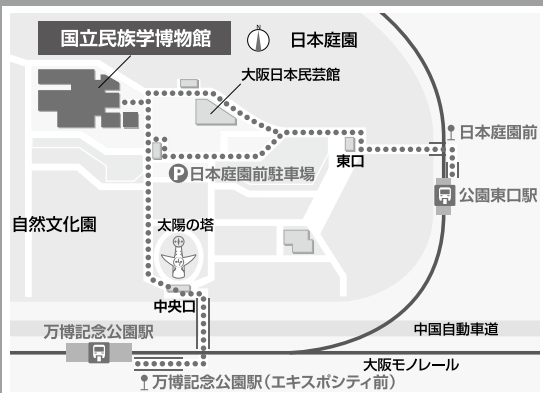
第41巻第2号通巻第473号 2017年2月1日発行

編集・発行 人間文化研究機構 国立民族学博物館
 〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園 10-1
 電話 06-6876-2151

発行人 池谷和信
 編集委員 丹羽典生(編集長) 河合洋尚 菅瀬晶子
 南真木人 山中由里子 吉岡乾

デザイン 宮谷一 長岡綾子
 制作・協力 一般財団法人 千里文化財団
 印刷 能登印刷株式会社

*本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係に
 お願いします。
 *本誌掲載記事の無断転載を禁じます。



交通案内

- 大阪モノレール「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車、徒歩約15分。
- 阪急茨木市駅・JR茨木駅から近鉄バスで「万博記念公園駅(エキスポシティ前)」 「日本庭園前」下車、徒歩約13分。
- 乗用車は、公園内の「日本庭園前駐車場」(有料)から徒歩約5分。「日本庭園前ゲート」横にある民博専用通行口をお通りください。
- タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れてきます。

みんなぱくホームページ

<http://www.minpaku.ac.jp/>

みんなぱくフェイスブック

<http://www.facebook.com/MINPAKU.official/>

みんなぱくツイッター

<http://twitter.com/MINPAKUofficial>



みんなのほくぶつかん みんなぱく

MINPAKU

ふたつの模型が語るもの

企画展「津波を越えて生きる——大槌町の奮闘の記録」2017年4月11日（火）まで

企画展「津波を越えて生きる」では、展示の中心となる岩手県大槌町の吉里吉里地区をあらわした1000分の1模型が、ふたつ並べて展示されています。これらは企画展プロジェクトリーダーの竹沢尚一郎教授の手により制作されました。

ふたつの模型は、東日本大震災による被災前と、被災後の吉里吉里地区のまちの姿をあらわしています。制作は、復興計画の策定のために国土交通省が新しく作った地形図をもとに標高2メートル刻みに土台を作ることからはじまり、被災前のは住宅地図や航空写真を参考に、被災後のものは地域を一軒一軒歩いて家屋を作っていました。ひとつが完成するのに1カ月半かかったとのこと。苦心したのは土台を作るところ。正確に作らないと、家を図面どおりに配置することができないのだそうです。被災前の模型の制作や屋根の色塗りには地元の方々にも協力いただきました。「俺の家はもっと大きかった」「屋根は南向きだった」などと懐かしむ声もあがり、和やかな雰囲気だったそうです。

竹沢教授が模型を制作したのは、失われてしまったまちを再現するとともに、震災の教訓を現地の人だけでなくわたしたち自身にも伝えるものになりたいというのが理由です。被災

後の模型は、まちのどの部分が被災したのかがわかるだけではありません。逃げないで家にとどまった方、逃げる途中で亡くなった方をあらわすポイントに加え、被災前に住民に配布されたハザードマップの津波の浸水予測（標高8メートル）と、明治29年の明治三陸地震での浸水域（標高14メートル）がラインで示されています。東日本大震災では実際には標高16メートル付近まで津波が来ていたといわれますが、この模型からは、ハザードマップと明治三陸地震のふたつのラインのあいだで亡くなった方が多いことがわかります。もし明治三陸地震での教訓をいかせていたら、被災状況はどのようになっていたのか。さまざまなことをふたつの模型は伝えてくれます。竹沢教授は、企画展の終了後はこの模型を地元へ寄贈することになっているそうです。

災害は、その地域の人びとだけの問題ではありません。形は違えど、誰にでも起こることかもしれません。そのとき、わたしたちはどうするのか。過去の教訓を未来へどのように継承していくのか。東日本大震災の被災と、その復興のため奮闘する大槌町の人びとの姿をとおして、これからのわれわれについても考える企画展に、ぜひお越しください。



左が被災前、右が被災後の吉里吉里地区の模型（部分）です。浸水予測や実際の浸水域の標高、亡くなった方の場所など、さまざまなことを伝えてくれます

みんなぱくをもっと楽しみたい人のために—————会員制度のご案内

詳細については、「国立民族学博物館友の会（一般財団法人千里文化財団）」までお問い合わせください。

電話06-6877-8893（平日9:00～17:00）

国立民族学博物館友の会

本館展示の無料入館や特別展示の観覧料割引にくわえ、『月刊みんなぱく』や会員機関誌『季刊民族学』などの定期刊行物や、毎月の友の会講演会、セミナーなどを通して多様な文化の情報を提供しています。

みんなぱくフリーパス

1年間、本館展示へ何度でも無料で入館いただけます（特別展示は観覧料割引）。他にも、みんなぱくを楽しむための特典がいっぱいです。

国立民族学博物館

キャンパスメンバーズ

みんなぱくと大学等教育機関との連携を図り、文化人類学、民族学にふれる学びの場を提供することを目的とした会員制度です。